

英語

京都大学 (前期)

<全体分析>

試験時間

120分

解答形式

記述式

分量・難易 (前年比較)

分量 (減少・やや減少・変化なし・やや増加・増加)

難易 (易化・やや易化・変化なし・やや難化・難化)

出題の特徴や昨年との変更点

読解総合：2024年度にあった空欄補充問題は出題されなかった。

2023年度、2022年度では出題されていなかった説明問題が大問Ⅱで出題された。

英作文：和文英訳は例年通り。自由英作文は2024年度とは異なり、大問Ⅳとして再び独立し、テーマに対して賛成・反対を述べたのちに主張の論証と総括する文を含めて合計で80語から100語で書くというものとなった。

その他トピックス

なし

<大問分析>

番号	区分	出題分野・テーマ	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)	難易度
I	英文解釈	「消失が危惧される言語共同体」 (550words)	(1) 構造的に難しいところはない。require O to do も頻出の構造だが、require がイタリックになっていることに注意したい。mark out がやや難しい。ここでは distinguish; highlight といった意味。not others は not mark out others(=other parts of reality)を短縮した表現。 (2) 2文とも構造的に難解ではない。especially 以下は「small language communities の中で特に…」の意味であり、あくまでも could be quite stable が述部である。 (3) with which it is clearly linked の it は linguistic diversity なので、訳出の順序に工夫を要する。rugged はあまり見かけない単語。nation-state も訳出しづらい。 出典：Ross Perlin, <i>Language City: The Fight to Preserve Endangered Mother Tongues in New York</i> , 2024.	標準
II	英文解釈	「ビッグバン理論が表す2つの意味合い」 (589words)	(1) 3年ぶりに下線部説明問題が出題され、しかも久しぶりに字数指定された形式となった。直前の内容を抜き出す形で指定字数にまとめればよく、対処は比較的容易であっただろう。なお、解答例に示したほかに、the single moment ... of all things の部分を訳出する形でまとめてもよい。 (2) 第1文は2つある関係詞節の処理と2つ目の関係詞節内にある whether 節の処理が構造的なポイント。1文目全体で3か所ある並列の構造を正しく把握したい。語句の面では or otherwise の訳出に注意。第2文の前半では go some way to doing という定型表現が用いられているが、受験生にはあまりなじみがないかもしれない。It が a complete theory を指していることを把握したうえで、文脈から意味を推測したい。あとは the way it is の訳出が問われているぐらいか。第2文の後半 (but 以下) では we have が all を先行詞とする関係代名詞	標準

			<p>節であること（関係代名詞自体は省略）を把握するほかは、suggesting ... itが some ... sketches を説明していることの理解が構造的なポイント。admittedly や well-motivated はやや難度が高かったかもしれないが、それ以外の語句はしっかりと訳出したい。</p> <p>(3)第1文は What we can do(S) is(V) make ... (C) という基本構造がつかめてたかどうかはまずポイント。the first ... its story は the very ... Universe's evolution を同格的に言い換えたもの。第2文前半は It turns out (that) S V ... という定型表現の訳出が問われている。第2文後半 (and so 以下) は not so much ... as ～と同義である not so much ... but ～の構文がつかめたかどうかは最大のポイント。あわせて the ... idea に対する同格の that 節が文末まで続いていることの理解が構造的なポイント。started the thing rolling は文脈から意味を推測する必要のある言い回しで、受験生にはやや訳しにくかったと思われる。</p> <p>出典: Chris Lintott, <i>Accidental Astronomy: How Random Discoveries Shape the Science of Space</i>, 2024.</p>	
III	英作文	「心と顔の表情の関係」	<p>2024 年度と同様に、いやそれ以上に処理しやすい出題である。その意味で、これまでの学習で身につけた力がそのまま解答に反映するような問題であるので、基本的な事柄をきちんと身につけた受験生は高得点が望め、そうでない受験生との間に差をつけられる問題ではないだろうか。</p>	標準
IV	自由英作文	「人工知能が人間の想像力に与える影響」	<p>語数や解答用紙の使い方の他に、「選択した主張を提示する文、理由や例などを述べて主張の妥当性を論証する文、それまでの主張と論証を総括する文を必ず含めること」といった非常に詳しい指示が付き、ある意味で誘導のかかった問題となっている。テーマとしてはありがちであるが、限られた時間内に限られた語数で解答をまとめるのは決して容易ではない。</p>	標準

注：区分は「英文解釈」「読解総合」「英作文」「文法・語法」「聞き取り」「その他」

難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

読解問題では今年度は英文和訳問題と内容説明問題という構成だったが、2024 年度のように空欄補充問題が出題される可能性も考慮に入れて、和訳だけに偏らずバランスの取れた学習を心がけること。内容説明問題では、該当箇所をどこまで正確に読むことができるか、どこまでを解答に盛り込むかが問われる。英作文では大問Ⅲは英訳問題で定着した。過去問の英訳問題の練習を含め、各人の実力に合わせて演習を積む必要がある。自由英作文問題は、2024 年度が英文に関連した意見論述型問題。2023 年度が会話文下線部補充問題、2022 年度が意見論述型、2021 年度が会話文下線部補充問題、2020 年度が手紙の形式、2019 年度が2024 年度と同じく英文に絡めた意見論述型…と、形式が固定されていない。今後も形式が変わる可能性は十分にあるので、さまざまな形式の問題に触れ、実際に答案を作る演習をすることをすすめる。